

戦後

美空ひばりとその時代

本田靖春

講談社

戦後

美空ひばりとその時代

本田靖春

講談社

本田靖春（ほんだ やすはる）

1933年、京城に生まれる。ノンフィクション作家。1955年、早稲田大学政経学部新聞学科を卒業。読売新聞社に入社。社会部勤務、ニューヨーク特派員などを経て1971年退社。

著書に『現代家系論』『ニューヨークの日本人』『私戦』『警察^{サツ}回り』『不当逮捕』『誘拐』『庇』などがある。

「戦後」——美空ひばりとその時代

1987年11月20日 第1刷発行

著者——本田靖春

定価——1300円

© Yasuharu Honda 1987 Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

☎ 東京 03-945-1111（大代表）

装幀——平野甲賀

印刷所——慶昌堂印刷株式会社

製本所——株式会社黒岩大光堂

●落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは学芸第二出版部宛にお願いいたします。

ISBN4-06-203554-5 (0) (学2)

「戦後」

——美空ひばりとその時代

第一章

美空ひばりは一九八七（昭和六十二年）五月二十九日、済生会福岡総合病院の特別室で五十回目の誕生日を迎えた。だが、入院中の身ということで祝いごとはなく、ひばりには、華やかなスターの座について以来、もっとも寂しい誕生日であったろうと思われる。

その前年はひばりの芸能生活四十周年に当たっていて、彼女は三月に東京・中野サンプラザホール、名古屋・愛知厚生年金ホール、大阪・厚生年金ホールで記念リサイタルを開いた。恒例である梅田コマ劇場（九月）、新宿コマ劇場（十一月）の定期公演も四十周年記念と銘打たれて、いちだんと盛り上がりを見せた。そして、暮れには、帝国ホテルで豪華なディナー・ショウを催し、まさに記念すべきこの年を締めくくったのである。

年が明けて今年（昭和六十二年）の二月に、ひばりは定期検診を受けた。その結果、以前からの肝機能障害がかなり悪化していることがわかって、彼女は好きだった酒をやめる。

ひばりはまた、その二年前から腰痛にも悩まされていた。痛みをやわらげるため、彼女は整体マッサージにかかっていたのだが、それが骨の異常からくるものだと、まったく考えていなかった。整体マッサージは逆効果しかもたらさないことを、入院後に知るのである。

定期検診は内科だけのものだったので、骨の異常は見過ごされたままだったが、その時点ですでにひばりは、肉体的に舞台がつとまる状態にはなかったのである。

しかしそれにもかかわらず彼女は、五月一日から二十七日まで、東京・浜町の明治座で行われる予定の川口松太郎追悼公演に意欲を燃やしていた。

周囲は彼女の体調を案じて、出演を思いとどまらせようとしたのだが、故人を生前「川口のパパ」と呼んで慕っていた本人の強い意志は変わらなかった。

出し物は、初演と二回目の演出を川口自身が手掛けた「お夏清十郎」で、ひばりは中村時蔵の清十郎を相手に、遊女皆川と但馬屋お夏の二役を演じることになった。

ひばりは、それが役のうえのことであっても、暗い自分になるべく出したいくない、という理由から、陰の多い皆川役の出番は早目に終わらせて、愛に強く生きるお夏に比重をおいた舞台になるよう、脚本・演出担当の沢島正雄に注文を出した。

制作発表があつたのが四月二十日のことである。

「最近では芸能生活四十一周年にひっかけて、私も四十一歳になりました、なんて挨拶すると、正直な男性ファンが立ち上がって、ウソつけ、もうじき五十じゃないか、とやじるんですよ」記者会見の場で、ひばりはそういう冗談をとばしながらも、近頃は若いファンが増えていることに触れて、

「今年も、まあ大丈夫らしいわ」

と、笑顔をのぞかせた。

そのとき、ひばり自身が公演を乗り切れると踏んでいたのは疑いもない。しかし、肝機能障害の自覚症状はともかく、腰痛がかなりのものであったことも、また疑いない。

じつをいうと、私はその前年の八月中旬に初めて青葉台（東京・目黒区）のひばり邸を訪ね

たときから、彼女の歩き方に異常を感じていた。

応接間での二時間にわたるインタヴューを終えての別れ際、ひばりは自分のアーム・チェアから立ち上がって、二階に通じる階段へ向かったのだが、両手を腰のうしろに当てがって、そろそろと歩を運ぶさまは、どう見ても健康な人間のそれではなかった。彼女の歩幅は履いていたスリッパの長さほどでしかなく、しかも足の動きはしごくゆっくりで、病院の廊下で見かける、手術から間もない入院患者を思わせた。

その後、私は、九月の梅田コマの公演と、十二月の帝国ホテルでのディナー・ショウをのぞいたが、ステージでのひばりの身のこなしには、客席から観ているかぎり不自然なところはなく、私は青葉台でのことをなんとなくしに忘れていた。

ところが、年が改まって三月末にふたたびひばり邸を訪問した際、彼女の歩き方がさらに不自由になっていることに気づいたのである。

後日、関係者に質したところ、二年前にひばりが主催する五月恒例のゴルフ・コンペで腰をひねったのがもとではないか、という説明であった。

その場ではそれで納得したのだが、一カ月と経たない四月二十四日朝、自宅でとっている報知新聞を開いて驚く。〈絶対安静一カ月〉〈病名は「両側大腿骨頭壊死」〉〈明治座公演中止〉の見出しが目飛び込んできたからである。

同紙は、その前日に福岡のホテルニューオータニで行われた記者会見の内容を、次のように

伝えていた。

〈小川（済生会福岡総合病院）副院長によれば、両側大腿骨骨頭壊死^{えし}というのは、分かりやすく言えば股関節の付け根にあたる部分の骨の組織が壊れ、変形していく病氣。（ひばりの場合）原因がはっきりしないため「特発性」と名付けられているが、九歳のころ交通事故に遭い、九死に一生を得る大けがをしたことが遠因とも考えられるという。

自覚症状のあったのは六十年五月、ゴルフをしている最中。「両足内側に引きつるような痛みが走ったようです」と小川医師。昨年五月ごろからはひんばんに「足が痛い」と周囲にもらしていたが「私はファンのために踊らなくちゃ。大丈夫、大丈夫——というんで、検査を受けろとは言い出せなかった」と森（ひばりプロダクション）制作部長。「とても常人では歩けない状態がここ一、二年は続いていた」というから「歌謡界の女王」ならではのプロ根性が災いしたようだ。

八五（昭和六十）年の九月、梅田コマ劇場の定期公演中に、腰を激痛が襲った。ひばりはハリ治療を受けながら、公演を乗り切った。

翌八六（昭和六十二）年は前述の通りひばりの芸能生活四十周年に当たっていて、定期公演のほかにはさまざまな記念イベントが組まれており、腰の痛みはおさまるどころか、激しさを

加えていく。そして、八七年に入ると状態はますます悪化し、四月十日、弟哲也の遺児で養子になっている和也の高校入学式の際には、付き人に左腕を支えられながら出席する姿を写真週刊誌に写されもした。

ひばりは明治座公演の制作発表の席で、笑顔を絶やさず、つとめて明るく振る舞っていたが、そのとき腰の痛みは我慢の限度に達していたと思われる。

私が美空ひばりにもっとも近い筋から聞いた入院に至るいきさつはこうである。

中村時蔵が四月二十日から二十六日まで大阪の新歌舞伎座の「陽春四月大歌舞伎」に出演することが決まっていたので、ひばりもそれに合わせて二十一日から三日間、明治座の稽古を休み、腰痛の原因をはっきりさせるため、検査を受けることにした。

当初、そのための候補にあげられたのは、東大および京大の付属病院であった。ところが、問い合わせしてみると、ベッドの関係でひばりが希望する三日間では検査が不可能とわかった。

そこでひばりは、翌二十一日、京大の医師から紹介された福岡市中央区天神の済生会福岡総合病院に赴いて検査を受けた。

その結果、両側大腿骨骨頭壊死という診断が下されるのだが、ほかにも肝機能障害による栄養失調も指摘され、即入院となった。

前出の人物は、翌夕、病院から呼び出しの電話を受けて、その次の日、朝いちばんの飛行機で東京から福岡にかけつけた。

「本人（ひばり）に会う前にまず担当医に会ってくれ、ということ、見せられたのがレントゲン写真だったんですね。医学に素人のぼくにも、すぐに異常はわかりました。本来丸いはずの大腿骨骨頭が、四角く変形しちゃってる。参考までにと、健康体のレントゲン写真も見せてくれましたけど、それを見るまでのこともなく、おかしいのはひと目でわかりましたからね。まさかそれほどひどいとは思ってもいなかっただけに、たいへんショックを受けました」

と彼はそのときの驚きを隠さない。

入院直後から、『美空ひばり再起不能説』がマスコミに流れた。が、推測の根拠は、大腿骨骨頭壊死より、むしろ内臓の異常のほうにおかれていた。

前出の人物は再起不能説を否定しながらも、肝機能障害が進行していることを、次のような言い回しで認めた。

「骨の異常にも驚きましたが、栄養失調という診断にはびっくりさせられました。彼女の場合、まったくの悪循環だったわけです。先生の説明によると、肝臓が弱っているから、体の末端組織である骨にまで栄養素がいきわたらない。たとえれば、油をささないでモーターを回していたものだから、ボール・ベアリングが擦り切れてしまったようなものだ、と。その状態が大腿骨骨頭壊死というわけですね。痛いから睡眠がとれない。それで食欲が出てこない。だから栄養失調になって、骨がいっそうすり減る。その悪循環だったんです」

彼は病院にかけつけたその場で、医師から次のように申し渡されたという。

「仕事を当分休んで療養するよう本人を説得してくれなければ、生命のほうは責任を持てませんよ」

三階の病室へ上がって行くと、ひばりはベッドの中で仰向けになって、「お夏清十郎」の台本を読んでいた。彼女は明治座公演で、この芝居のほかに「歌は我が命」というタイトルの歌謡ショウを予定していた。到底舞台がつとまる状態にならないにもかかわらず、本人はあくまでもやりとげるつもりでいたのである。

大腿骨骨頭壊死は厚生省が指定している難病の一つである。医師はA4判で厚さが二センチからあるこの病気の説明書とレントゲン写真をひばりに示して、病状を説明した。さすがの彼女も納得するしかない。

「私は今日から病人になります」と宣言した。

これで明治座の川口松太郎追悼公演は中止となり、その穴埋めを杉良太郎が買って出たのは周知の通りである。

その後、ひばりは担当医がお墨つきを与える模範的患者になりきって、八月三日の退院に漕ぎつけた。

その日、六月十六日に肺ガンで逝った鶴田浩二の四十九日法要が、ひばり邸からさして遠くない東京・深沢の故人の自宅で営まれていた。

美空ひばりと鶴田浩二とのかかわりは、松竹映画『あの丘越えて』（瑞穂春海監督）での初共演以来である。一九五一（昭和二十六）年十一月に封切られたこの映画は、同名の主題歌の大ヒットを生んだ。

鶴田はこの映画で、当時十四歳だったひばりが演じる牧場の少女が淡い思慕を寄せる大学生の役をつとめた。そして、実際にも、ひばりの初恋はこのときであつたとされている。

撮影の合い間、ひばりは鶴田を「お兄さん、お兄さん」と慕って、そのそばを離れなかったという。それで芸能誌が「ひばりの初恋」と書き立てたのだが、二人で馬の背にまたがっているブロマイドを改めて見てみると、彼女はいかにもあどけない。そのときはもう中学生になっていたのだが、まだ小学生のような幼さを残している。「お兄さん」というのは、ひと回り上の鶴田に対する、少女期にありがちな甘えの表現ではなかったか。

それはともかく、鶴田の死が、彼にまつわるさまざまな思い出を、ひばりの脳裡に蘇らせたであろうことは想像に難くない。そして、彼女は、自身の来し方にも感懷を抱かずにはいられなかったはずである。

ひばりが退院した八月三日は、高倉健が東京・成城の石原邸を弔問した日でもあった。石原裕次郎が肝細胞ガンのため五十二歳で亡くなったのは七月十七日のことだが、マスコミに目立つのを嫌う高倉は、この日初めて手向けに訪れたのである。

この夏は芸能人の死が相次いだ。裕次郎の前日にトニー谷が肝臓ガンのため六十九歳で逝き、裕次郎の三日後には有島一郎が心不全のため七十一歳で不帰の人となった。

美空ひばりは、肝機能が通院できるまでに回復し、骨頭壊死は通常の歩行が可能ということになって退院できた。したがって、物故者に続けて彼女の名前をここにあげるのは、不適當である。ただ、入院中、これら同じ芸能界に属する人たちの訃報に接するたび、自らも病とたたかっている身であるだけに、彼女の胸中にはいろいろな思いが去来したに違いないといえるであろう。

ところで、マスコミは石原裕次郎の死を、最大級の扱いで悼んだ。そして、スポーツ紙は「国民榮譽賞か」の観測をかけた。七月二十日朝、一般紙の記者たちに質問された中曽根首相は、「世論の盛り上がりがあれば研究することになるだろう」と、前向きともとれる発言をする。その日の夕方、首相が石原邸を弔問するに及んで、故人への国民榮譽賞授与は確定的という雰囲気になった。「裕次郎さんは時代を代表する英雄的な人だ。天馬空を行くようで、若い人に既成概念や秩序を破らせる勇気を与えた」と、首相もまた最大級の賛辞を捧げたからである。

しかし、この件はなんととはなしに沙汰やみになってしまった。首相の周辺に消極論が強かったためだとされている。

その一つに、「裕ちゃんにやるなら、美空ひばり、岡本綾子にもやらなければならない」と

というのがあった、と一部で報じられた。その真偽のほどは定かでないが、時代を代表するといふことでいえば、芸能界を通じての第一人者は美空ひばりである、と言い切っても、異論は出ないのではなからうか。この場合、彼女に対する好悪の感情は別物である。

石原慎太郎は『文藝春秋』（一九八七年九月号）に寄せた「裕さんよ、さらば」と題する文章の中で、弟裕次郎は三つの時代を体現した、と書いている。

裕次郎が俳優として登場したのは、経済白書が「もはや戦後ではない」という流行語を生んだ一九五六（昭和三十一年）であった。

デビュー映画『狂った果実』の原作者である石原慎太郎は、裕次郎が体現した第一の時代を「当時、歴然として兆してきた消費社会、消費文明の予兆の中で、人々がようやく戦後の飢餓感から解放され、新しい充足を予感し、古い拘束からの解放と自由に酔おうとしていた時期」と規定する。

第二の時代は「高度経済成長のうちに日本の産業化が完成されていく過程」で、裕次郎の映画『黒部の太陽』『栄光への三〇〇〇キロ』などが、「重工業化の完成の上に、明治以来念願してきた近代国家としての成熟をついに完成した時代の表徴だった」と、石原慎太郎はいう。

そして、第三の時代は、裕次郎が『太陽にほえろ！』や『西部警察』といったテレビのドラマ・シリーズで「寡黙ではあるが、確かな決断と責任を果たしてくれる、厳しくかつ優しい」人物像を演じた時期で、彼は「文明の爛熟とともに過剰な充足、生活のソフト化の中で失われ

ていった家庭にあるべき父親の姿を体現した、というのが、弟に先立たれた兄の見方である。

じつをいうと、私は石原裕次郎の映画を一本も観たことがない。ただし、芸能界における彼の存在の大きさと好ましい人柄は、テレビや雑誌を通じて知っていた。

それにもかかわらず、彼の映画を観ずに終わったのは、なぜであったのか。その問いを自分の中で突きつめていくと、彼と私は一つの時代を共有していなかったから、ということになりそうである。

その一つの時代とは「戦後」であるのだが、ここで私はごく簡単に自分のことを語っておかなければならない。

一九三三（昭和八）年早生まれの私は、敗戦の年に中学に入った。わずか一学期のあいだだけだが、軍事教練を受けた最後の世代の一人である。そして、私は入学から間もなく、陸軍幼年学校に願書を出した。典型的な軍国少年であった。

試験の前に日本が降伏して、京城（現在のソウル）育ちの私は内地に引き揚げてくるのだが、それまでの間、帰属する国家体制の崩壊を、抑圧から解き放たれて一気に噴き出した現地の人々の反日感情の高まりの中で実感した。

その折に味わった敗北感、虚脱感、喪失感といったものを昂揚感へと転化させていってくれ